

梅川（道行故郷の春雨）

へ落人のためかや今は若草の 薄尾花はなけれども 世を忍ぶ身の後や先
人目を包む頬かむり 隠せど色香梅川が 馴れぬ旅路を 忠兵衛が 温めら
れつ 温めつ 石原道をはかどらぬ へ身の繰り言は愚痴なれど 大恩受け
し養子親 御苦勞かけしその上に 明日の嘆きの数々は 解くに解かれぬ三
度荷の 重き不孝の罪科と かこち涙に目も潤む へ顔つれぐと打ちまも
り それそのように言わんす程 この梅川が身の辛さ 惚れた女子のしよ
うがには 仇な勤めを實にして 末は夫婦と言ひ交わし 今のお前の憂き難儀
堪忍してとばかりにて 後は涙の村時雨 へ野辺のみつおりしおるにも
急げば早き故郷の 新口村にぞ着きにけり

へコレ ここは私が生まれた在所 四五町行けば実の親 孫右衛門様の
所なれど 今の身の上をお目にかけるは大きな不孝 この藁葺きは
忠三郎というて親達の家来同然 暫し身の上を頼んでみん

へそんならここがお前の在所 新口村でござんすかえ 人目厭うて
来たなれど ほんに思えば

へ大坂を立ち退いても 私が姿目に立てば かり籠籠に日を送り へ奈良の
旅籠屋三輪の茶屋 五日三日と夜を明かし 二十日あまりに四十両 使い果
たして二分残る 金故大事の忠兵衛さん 科人にしたも私から さぞ憎かる
うお腹も立とうが 因果づくじやと諦めて お許しなされて下さりませ

へ由ない私故 お前に心遣いさせますと思えば ひよつと愛想も

尽きようかと そればかりが悲しゅうござんす そうしてここは
劍の中 こうして居ても大事ござんせぬかえ

へイヤ／＼男気な忠三郎 頼んで今宵はここに泊まり 死ぬるとも

故郷の土

へ生みの母の墓所へ一所に埋もれ 嫁姑の未来の対面させたいと 目もうろ／＼と泣きければ へそれは嬉しゅうござんしょう さりながら私がほんの母さんは京の六条数珠屋町 一目逢うて死にたいと又も涙に咽び入る
へオオ道理じゃ／＼ 恩のある養子親 妙閑様や許嫁のおすわへも
不埒の詫 オオあれ／＼あれへおみえなさるは親父様 孫右衛門様ぢや この世のお別れ余所ながらのお暇乞い

へそんならアノもじの肩衣を着てござんすが お前の父さんでござんすかえ ほんに親子とて争われぬもの 目元なら口元なら お前
によう似た事わいな

へサ、そのようによう似た親と子が 言葉さえ交わされぬは 何と
したこの身の因果

へほんに今がお顔の見始めの見納め 私しや嫁の梅川でござんすわ
いなア

へ貴方へ御苦労かけますも みんな私故 この梅川ゆえ

へアアコレ 人目にかからば互いの身の上少しも早う

へそんならこの世の

へはて未練なことを

へ平沙の善知鳥 血の涙 永き親子の別れには 安方ならで安からぬ 心残
して別れ行く

へおさらば

心残して別れ行く。